

平成25年度・大阪支部「春季歴史探訪の会」開催報告 (難波のルーツを訪ねて大阪・上町台地に行く)

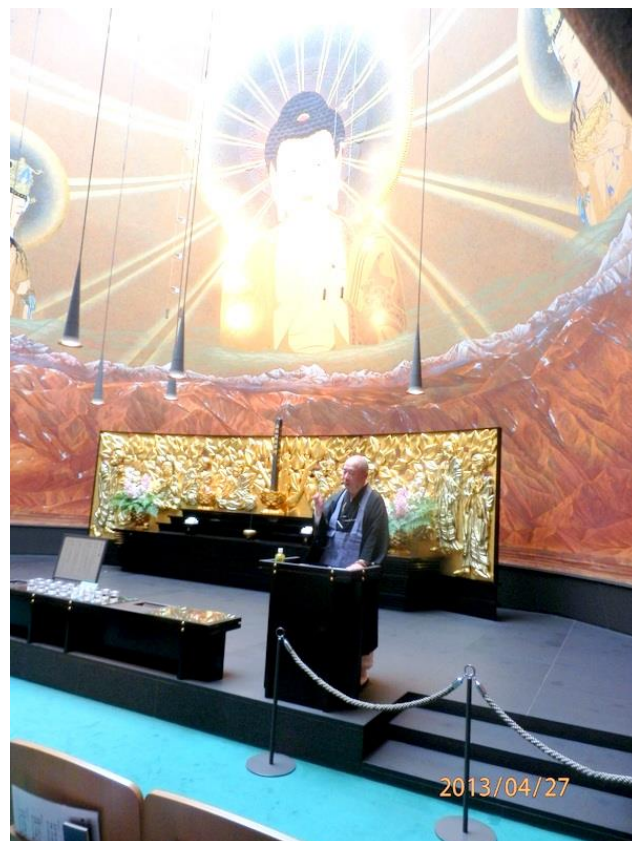
好天に恵まれた平成25年4月27日(土)総勢40名(内、ご夫婦5組)が、大阪城に隣接する「大阪歴史博物館」前に午前10時に集合。K39 松田清治氏は、はるばる岡山県からのご参加です。午前中は当館内で上町台地の地形的な成り立ち、復元された実物大の難波宮の大極殿、秀吉による大阪の町づくり、「天下の台所」と謳われた市井の様子などの見学に充て、当館の地下に眠る「難波宮遺跡ツアー」にも参加した。

昼食後は、3班に分かれて、ガイドさんの案内で「上町台地」の北端に位置し、前期、後期に跨る「難波宮跡」からスタートし、キリシタン大名細川忠興ゆかりの「越中井」や夫人の「ガラシヤ像」などを見ながら「三光神社」へ。ここは慶長の合戦の折眞田幸村が守る出城の跡で、幸村の掘った大阪城につながる暗道あとが「眞田の抜け穴」として今も残り、陣中姿の幸村の銅像が威容を誇る。この後はアップダウンの多い街中を歩いて江戸時代の僧契沖の庵跡「円珠庵」へ、この庵内にある榎の大木の幹に鎌を打ち込んで願うと悪縁が絶えるという信仰があり、多くの新旧の鎌が打ち込まれているさまが今でも見られ「鎌八幡」の名でも知られる。この後元禄年間の俳諧師、浮世草子作家である「井原西鶴」の墓を経て、民家から立ち上る炊煙を見て「民の竈は賑わいにけり」と述べられたとされる仁徳天皇を祀り、落語“高津の富”でも知られる「高津宮」(高津神社)に詣でて、行程の前半を踏破した。

行程の半ばに当る「生国魂神社」において、後半のガイドさんに交代。ここは親しみをこめて(生玉さん)と呼ばれ、神武東征の折日本列島の神々を奉った大阪最古の神社であり、境内社には土木建築業界の崇敬の篤い「家造祖神社」、金物業界の守護神「鞆(ふいご)神社」などがあり、我々にも関係の深い神社である。このあと「天王寺七坂」と呼ばれる坂を上り下りしながら「愛染さん」として初夏の風物詩“愛染祭”の宝恵駕籠で知られる「勝鬘院」(愛染堂)や、京都の清水寺に似せた舞台や滝がある、その名も「清水寺」などを巡る。この辺り一帯は崖の上にあたり夕陽がきれいに見えることから「夕陽丘」の町名がある。前出の眞田幸村の戦死跡碑や座像のある「安居神社」を最後に「一心寺」に至る。

この「一心寺」は、全国から納められた遺骨で造られた阿弥陀仏の骨仏で知られ、多い日には十万を超す参詣者があるとのこと。今回は寺内の三千仏堂において当寺の前住職である高口恭行長老より講演を頂く機会を得た。長老は京大の建築学科を卒業、住職として寺内の堂塔の設計を手がける傍ら奈良女子大教授として長年にわたり教鞭をとられるなど異色の経歴の持ち主でもあり、「一心寺の成り立ち」など興味深いお話を伺うことが出来、一同感動しきりであった。当寺において一部は解散し、多くは再びガイドさんに連れられ「四天王寺」の拝観へ。夕陽のさす境内を一巡し、説明を受けたあと午後5時半ごろ解散の運びとなったが、歩数計は優に二万歩を超えていた。近くにおりながら意外に知られていない「上町台地」をじっくりと知った探訪行であった。

(E36 藤原 康宏記)





日時：2013年4月27日（土）午後4時～5時

場所：一心寺三千佛堂

講演テーマ：一心寺の歴史と境内の広場化

講演概要

1. 高口恭行師（たかぐちやすゆき、僧侶としてはきょうぎょう）の経歴

- （1）一心寺の前住職、現住職の恭典師は長男、校友K39 長谷川啓治氏の中・高校の同窓
- （2）1940年6月13日神戸生まれ、上海で育つ、京都大学工学部建築学科卒業(西山卯三研究室)
- （3）元奈良女子大学教授、1980年から造家建築研究所を主宰(一心寺の建物その他を設計)
- （4）関西を代表する建築家、2003年関西建築家大賞を受賞

2. 一心寺の特色

- （1）檀家がなく、いろいろの宗派の人が参る寺、年中無休でお施餓鬼の法要を相続
- （2）お骨仏（現在7体、納骨15～20万柱/10年で一体の座像を作る。1.5～2万柱/年）

3. 歴史

- （1）浄土宗宗祖法然上人が草庵を結び、日想観を修した。
- （2）徳川家の庇護を受ける。（慶長5年家康8男の葬儀、大坂冬の陣で徳川の本陣）
- （3）江戸時代末に、庇護を受けていた総本山知恩院、徳川家の支援がなくなる。
 - ①中興上人が宗派を問わない寺として復活(大阪に出てきた農家の2・3男の寺)
 - ②納骨された遺骨でお骨仏を作り、供養し始めた。
 - （10年間に受け入れた納骨で一体の阿弥陀仏を作る。戦前に6体作った。）
- （4）昭和20年太平洋戦争の空襲で境内が焼失(6体のお骨仏も焼失)
昭和23年に焼け残った遺灰に加え新たな22万柱の遺骨で戦後の一体目を作り、現在七体目が開眼済み。

4. 訪問した4月27日は年次納骨供養大法要（前年納骨された方の法要）で12～15万人が参拝され、大混雑。

5. 新たな境内づくりの考え方、設計手法の紹介

- （1）前提条件、課題 沢山のお骨仏で参拝者が多い。敷地は小さい。
- （2）対策の考え方 境内を広場として整備、法要も広場で行う。
- （3）境内建物二棟（仁王門、三千佛堂）のコンセプト、仕上げ等の紹介

講演内容

1. 山門（仁王門、平成9年築）

- （1）長屋門が焼失。準防火地域・都市計画地域に建てられるのは鉄又はブロック造
- （2）考え方、コンセプト
 - 開かれたお寺を象徴する門
 - 新たな機能整備 何万人用のトイレ、野外舞台、休憩所（カフェテラス）
- （3）建物の構造、仕上げ材料、装飾品

- ①ガラスの屋根（極楽浄土の天空から光が降る。鈴がつき妙なる音を奏でる）
- ②鉄骨トラスの躯体（聖なるターラ樹の並木をイメージ）
- ③黒御影の壁（インドの聖地サンチーの仏塔をかこっている壁をイメージ）
- ④素手で裸形の阿形・吽形の仁王像
（武器を持たず非暴力で社会の悪に立ち向かい、人々の邪心をいさめる）
- ⑤門扉に天女の像(秋野不矩氏の原画を彫刻にしたもの)

2. 三千佛堂(第二講堂、平成 14 年に再建)

(1) 考え方、コンセプト

- ①開かれた寺(いつも門を開いている。＊キリスト教の教会等と同じ考え方
9～16時、いつでも入れる（一休みできる、心が休まる場、気楽に出入りできる。）
壁画、彫刻を開放する。
- ②日曜学校の会場
話を聞きたい人は何時でもいらっしやい。
当初はぼろ小屋からスタート。現在 200 名で満席(申し込み制)
- ③人間のいるところ、自分たちのいるところは暖かい所
仏教の光は仏様そのもの。太陽であり発光体である。

(2) 三千佛堂の名称

- ①倶舎論で仏教世界のこと
大きな山須弥山のとっぺん[上天]に大毘盧舎那仏（大仏様）、大日如来
中腹「中天」におびただしい数の仏様
麓「下天」に人間世界
織田信長 幸若舞の「敦盛」
“人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり、
一度生を得て滅せるもののあるべきか “
注．他説：三千佛とは、過去・現在・未来に出現する三千の仏様のこと

- ②建物内部の正面に大きな「山越の阿弥陀像」の絵
正面下部に広く横たわる山脈の上に大きな阿弥陀三尊像
- ③ 建物内部回廊の壁に千体の仏像を上げる計画

(3) 建物の構造、仕上げ材料、装飾品

- ①建物の入り口は、道路に面し、日中開いている。
- ②建物内部は二重構造
中心に高い天井の 200 席の講堂 、講堂を取り囲む回廊壁
- ③講堂の前方天井にはトップライト
「山越えの阿弥陀像」を明るく照らす。
＊「山越えの阿弥陀像」の光背には明るい光の線が放射している。
- ④回廊の壁に千体の仏像を上げる計画（進行中）
京都の三十三間堂は後白河上皇、平清盛が極短期間で作った。
一心寺は多くの人からの支援で時間をかけて作る。

*2100 年（今世紀中）には 1000 軀の仏像を上げる予定とか。

3. 境内には、他に高口長老の設計「日想殿」（信徒会館）、納骨堂、念仏堂等があり、それぞれユニークな形をしている。高口長老にそのコンセプトを別途お聞きしたいと考えている。